

「スイカって大きくて重いね」～収穫の喜びを味わう中で～ 刈谷市立富士松北幼稚園(愛知県刈谷市)

4月 「スイカの赤ちゃん(苗)って弱いんだね」～地域の人の助けを借りて～

初めて畑に行くとき、草がたくさん生えていた。草がいっぱい～」「スイカの赤ちゃんどこに植える？」と口々に言っていた。近所の畑でスイカ作りをしているKさんにスイカとメロンの苗の植え方と育て方を聞き、畝を作る場所の草取りをして帰った。いよいよ苗植の日、Kさんに教えてもらったようにビニールの畝を作る用意をして、出かけた。スイカは4種類、メロンは2種類の苗を用意した。また友達と協力して植えることができるように3人で1本の苗を用意した。(苗植では、年中時からの夏野菜一人一鉢の花栽培などの経験からポットから畑に移すことも、経験している。) ビニールの畝作りには少し手間取り、担任に手伝ってもらいながら、作業が完了した。幼児たちは「これなら大丈夫だね」と満足感に満ちた顔をしていた。

5月 草に栄養、とられちゃうよ」～草取りや水掛などの世話をする中で～

苗植から3週間ほどたち、Kさんから「苗が伸びて畝が窮屈になってきたから取った方がよい」とらアドバイスを受け、畑に出かけた。すると確かに苗は大きく伸び、畝の中で窮屈そうにしていたり、下の隙間から外に伸びている物もあった。

「(苗が)大きくなったねー」草もちょっと生えてきたね」「スイカも大きくなるけど、草も大きくなるのかなあ」とこの日は、畝を片付け、虫取りを楽しんで帰ってきた。

その1週間後、スイカの様子を見に出かけた。するとスイカは見事に大きくなり、近所のプロの方のスイカ畑に近づいてきていた。「見、わーもりもりしてる」見、これ全部スイカ？教師「スイカもあるけど草もすごいねー。スイカが草に負けちゃうかな」見、どうするの？教師「このままだとスイカが大きくなれないといけなから草抜きしようか」見「うん。草抜きしないと。」と意気込んでみたものの「見、先生、どれ取っているの？」見「どうやって取るの？」K見「どれか分からん」と言っている。草とスイカが絡み合った畑を目の前に手が出ない様子。教師「スイカの葉っぱはこれだから、細長い葉っぱや上に伸びてるのは草だよ。」見「これ？」と手にするがどうしているのかわからない様子。教師がスイカのツルをそと持ち上げ、「ここに残ったのは全部草だよ。」と抜いて見せた。すると「分かった。」とどんどん抜き始めた。



L見「何でこの草抜けないの？」M見「俺がやってやるわ。」と大きな草を見つけ、力一杯引っ張るが、なかなか抜けない。L見「一緒にやってみよう」と絵本「大きなかぶ」のように連なって引っ張るが、抜けない。今度はN見が「よし、私も手伝う」と今度は、草の株を半分ずつつかんで「せーの」と力を出した。少し根っこが見えてくると先ほど後ろに回って引っ張っていた幼児も同じように株を持ち引っ張った。3人で「うん」と力を入れるとようやく抜けた。N見「やった～」M見「強い草だったね」L見「この根っこすごく太い」N見「それに長～い」教師「よかった。みんなで草抜いてくれて。だってこんな太い根っこだとスイカが負けちゃうところだったもん」L見「見て見て、こんなに太い根っこだよ。やっと抜けたんだよ。」と友達に見せたり、N見「スイカが草に負けぬように草抜きしないと。」M見「よし。」とまた草を抜いたりした。

6月 「ここにも小さいスイカができてる！」～カラスからスイカを守るために～

草取りに出かけたある日、黄色の花がいくつか咲いているのを見つけた。担任から「スイカの花だよ」と教えてもらい、「ふ～ん」とのぞき込んでいた幼児から「先生、これ何？」と聞かれた。指で指した先に3センチほどのスイカができていた。教師「これ、スイカだよ！スイカの赤ちゃんだよ！」と少し興奮気味に伝えると「えー？これがスイカの赤ちゃん？」とどこ？」と見に幼児が集まってきた。「小さい。しましまがあるよ」「どこどこ？本当だ」「なんか丸くないね」「うん、なんか毛みたいなのがついてる」「つるつるじゃない」と見たことをいしながら半分は信じられない様子。

「カラスに食べられる？」

スイカの赤ちゃん発見から2週間ほどたったある日、同じように家庭で祖父がスイカを作っている幼児から「家のスイカがカラスにやられたからわらをかぶせた方がいい」と話を聞いた。早速幼児たちと話をし、わらをかぶせに行くことにした。

畑に着くとスイカはずいぶん大きくなり、葉と葉の間から見えているものもあった。幼児たちは大きくなっているスイカを見て興奮気味に「ここにもある！」「ここにも！」と次々と見つけていった。「こっちの方が少し大きい」と大きさの違いを見て言葉にする幼児もいた。大きくなったスイカを見て「食べられるのは嫌だ」という気持ちがふくらんだ。しかし、教師「これだとカラスにも見つからちゃうね。わらで隠しとかなないとね」と言っても「わら」が分からないので反応がない。保護者にわらを分けてもらい、畑の隅に置いておいて下さった。教師「これがわらだよ。Kさんがくれたんだよ」わらをかぶせると言ってもわらを触ったこともない幼児たち。手にわらを一つかみしてぱらぱらと振りかける幼児、スイカの上にほんの一つかみのわらをそと乗せ、「これでいい？」と聞くR見。教師「これでカラスから見つからないかなあ」S見「……教師「そうだ。Rちゃんのもあわせようか」と乗せてみる。教師「まだ見えちゃうね」T見「これも乗せる？」R見S見「うん」T見もそと乗せるだけで、どうしたらいいかわからない様子。教師は「これだと、風が吹くとわらが飛んで行っちゃうからね」と周りの葉に絡ませ、スイカの上にまんべんなくかかるように整えた。教師「これでいい？」R見S見T見共に「うん！」とぶずいて担任に「先生できたよ」と言っていた。

7月 「スイカって大きくて重いね」～収穫の喜びを味わう中で～

学校のプールに行った帰り道、畑を覗いて見るとさらに大きくなったたくさんのスイカや一本の株に20個以上もごろごろと実ったメロンがあった。中でもブラックボールは真っ黒で光っていて幼児たちの目にもすぐに飛び込んで来た。また、それよりも幼児たちや教師を驚かせたのが大きくて楕円形をしたピロマスターだった。幼児たちは「大きい!」「でか!」「どこどこ?」らわー、でっかい!など口々に言い、「ここにもあるよ!」あ、本当だ!と見つけたスイカを次々と見つけては、歓声を上げたり、友達に知らせたりしていた。

U 児は早速一番大きなピロマスターを抱えるような格好をして慎重に持ち上げようとした。そしてほんの少し持ち上げて、すぐにそーっとおろすと、大きな息を吐き出し、「ふー、重い」と言いつつ、次に「僕も」とV 児が持ち上げようとしたが、持ち上がらず、やはりW 児も「ふー、重い」と言っていた。X 児はブラックボールを持ち上げ、見て見て!と嬉しそうに見せてくれた。「これなら持てるよ」とそーっと下ろしていた。

そんな中収穫が次々に行われ、はさみで切り取っては畑の入り口付近に何度も往復して、真夏の暑い日差しの中汗びっしょりになりながら運んでいた。メロンは実が熟すと手で持ち上げただけでポロンととれていった。教師がにおいをかいで「あー、いいにおい」といってまねして友達と代わる代わるにおいをかいで「ほんとう」「メロンのにおいだ」とっこりしていた。

メロンと合わせて、一人1～3個幼稚園に持ち帰ることができた。中には、教師が見ても重いんじゃない?と思われる幼児もいたが、「大丈夫」と嬉しさもあり譲らなかつた。途中「重い、もーだめ」と言いつつながらも、誰も途中で投げ出すことなく10分ほどの道のりを歩いて収穫したスイカとメロンを持ち帰った。

幼稚園に帰ると嬉しくて、職員室にスイカを持って見せに行ったり、年中児の保育室の前で得意そうに見せたりしていた。

その日の午後、早速スイカとメロンの味見をした幼児たちは、幼児「黄色の小玉スイカは甘かった。幼児「ピンクのスイカは甘くなかつた」「ブラックボールは真っ赤だったよ。教師「そう、食べてみたの?」幼児「うん。一番甘かった。教師「へえー、いいな。先生も食べたいな。幼児「いいでしょう」とまた、違う教師と話していた。

その後、収穫したスイカを年中児や年少児に「七夕のお供えに」とおすそ分けしたり、自分たちが何度も味わった後、草取りを一緒にしてくれた保護者と一緒に味わったりした。

<考察>

畑で大きくなったスイカや20個以上もごろごろとなっているメロンを見て、全身で喜びを表し、収穫をにおいや大きさ、重さ、味で感じていた。あふれる喜びをいろいろな人に伝えていた。苗を植え、水をやり、草を抜いて「世話」をする中で苗が大きくなり、花をつけ、小さな実をつけるのを見て、そのときそのときの喜びを味わい、期待をふくらませてきたことでこのような幼児の姿につながったと思われる。スイカやメロンの栽培を通して、幼児は、植物に対して関心を深め、またやってみようと思ったと思う。

まとめ

この研究を通して、今、目の前にいる幼児たちの作物に触れる経験の少なさを本当に実感した。だからこそ幼稚園という場で、幼児期の感性豊かなこの時期に、意図的に経験させていく必要があると思った。作物が育っていく過程の中に不思議さを見つける目、感動できる心、知りたいと思う心を養い、食を育てる喜び、自分の作物を食べる喜びを味わってほしいと実践してきた。幼児と共に食物を育てる中で幼児の好奇心、探求心の芽にいっぱい触れることができた。今年度のこの研究から学んだ、「幼児自身の知識」「食を育てる喜び、自分の作物を食べる喜びを味わえる心」などを土台に今後は地域の人たちの知恵を借りたり、また保護者の協力を得ながら、畑の中で育った生命からまた新しい生命が生まれてくることを幼児たちに体験させ、さらに科学する心を高めたり、深めたりしたいと思った。

みどころ

1学期間かけて、スイカ・メロンの栽培にかかわってきた子どもたちの大きな期待にこたえる収穫があったことで、心に残る栽培の喜びを体験することになりました。どこに苗を植えたらいいいのか見渡すほどに広い畑、これでスイカを育てられるのかと思うほどに弱々しい苗、知っているスイカとは違う小さなスイカの赤ちゃん、カラスからスイカを守る「わら」、友達と力を合わせないと抜けないくらい根をはった草、そして、重さを我慢しないと持ち帰れないほどに大きなスイカ。日常生活にも幼稚園での遊びの世界にもない、自然の不思議や自然にかかわる喜びを味わい、栽培をするための知恵やたくさんの作業の過程を知り、体験を通して感謝や思いやりの心を養う活動を満喫することができました。たくさんのことを教わった畑のKさん、カラスの情報をくれた友達の祖父、力を合わせて草取りや収穫をした友達、援助をし支えてくれた先生への思いを意識できたことで、豊かな感性が育まれたことも分かります。

